

第2章 演劇の社会学

——分析のための基本的視点——

宮本 孝二

この小論で展開しようとするのは、演劇という社会的現実、さらには演劇にかかわる社会現象の社会学的分析の視点を体系的に整理する試みである。

演劇の社会学といえば、すぐに思い浮かぶのが、社会的現実を演劇的な視点で分析するという立場であろう。しかし、本論で検討の対象とするのは、文字どおりの演劇、すなわち社会的現実としての演劇、フィクションとしてこの現実立ち上げられる演劇それ自体である。そのような意味での演劇の社会学はそれほど展開されてきてはいない。もちろん、演劇論や演劇評論は多いが、社会学者の手になる演劇の社会学は少ないのである。

すでに存在する演劇論や演劇評論から、演劇の社会学は多大な恩恵を受ける。しかし、演劇の社会学の体系的構成が把握され整序されることなしには、その恩恵を十分に受けることさえできないのである。これは個別領域に成立する社会学すべてに当てはまる課題なのであるが、演劇という領域においてもそうなのである。

本稿の全体の構成は、社会学の基本的な視点に準拠している。すなわち、分析対象となる現象について、それに作用する条件、それを生み出す条件、それによってもたらされる変化に焦点を合わせるという視点である。本稿の場合、対象となる現象はもちろん演劇であり、演劇に作用する条件を本稿では「演劇に反映する現象」と読み替え、そして演劇を生み出す条件は「演劇を実現する現実」であり、演劇によってもたらされる変化は「演劇が実現する現実」と対応している。

まず第1節では、時代を読み込む眼力をもった劇作家や演出家によって認識され表現される「演劇に反映する現実」すなわち「演劇が映し出す現実」をとりあげる。テーマやストーリー、表現方法や形式にそれが示される。そのような

演劇を手掛かりに現実を把握するという場合の諸方法、すなわち個々の演劇について反映している現実を問う方法、ある範囲の演劇群を対象にそれらに反映している現実を問う方法、それらを時代的に配列して現実の変動を探るという方法、1つの演劇が時代の変化によって意味づけを変えて行くことを手掛かりに現実の変動を探るという方法などを順次検討する。

次に第2節において、演劇を実現する現実、すなわち現実的な存在としての演劇を構成している諸個人・諸組織、すなわち諸主体の行為と相互行為の総体を分析する視点について検討を深めたい。そこでは、組織運営の課題から始めて、演劇を構成する個々の主体について、また、演劇を取り巻く条件について、論点が整理されることになる。

そして第3節では、「演劇が実現する現実」を、演劇が遂行し充足する機能として分析する視点の整備を行う。演劇体験および観劇体験がもたらす帰結を、原初の演劇の機能から始め、娯楽機能、政治機能、教育機能、経済機能、そして文化機能などについて順次検討する。

第3章 贖罪のパフォーマンス

——『欲望という名の電車』再考——

石塚 浩司

多くの近代演劇には、役者を演じる登場人物の行為が演技にほかならない場合がある。ランチもまさにこのような登場人物に相当する。彼女の〈演技〉は、1940年代のアメリカというヘテロ・セクシュアルを正統とする土壌の中で、少数派であるホモ・セクシュアルの市民権を主張する役割を担っており、この意味で意識的・主体的な性格を帯びる。ランチの〈演技〉は、スタンレーとの対立関係のコントラストにおいて、セクシュアリティをめぐる逸脱と多数派との対立という様相を見せ、さらには、作品全体として、性的逸脱の讃歌になっている。